

# スタジオ夜話

第74話 スタジオ夜話（番外編）

## サウンドドラマの制作（まとめⅠ）

### ☆ はじめに

いよいよ梅雨のシーズンです。梅雨入りすると梅雨明けはいつかななどと思うものですが今年は効果音「雨音」的に少し楽しんでみようと思います。1983年の楽曲「雨音はショパンの調べ」は、イタリアの男性歌手ガゼボの歌唱により世界的なヒットとなりました。日本では、小林麻美 with C-POINT のシングル（日本語カバー）がヒッ

トしたことで有名です。雨降りの午後、ショパンでも聴きながら紅茶、楽しみながらひと時を過ごすのもお洒落かもしれません試してみてください。さて今回のスタジオ夜話番外編「サウンドドラマ制作」おかげ様で長い連載となりました。そろそろまとめに入ります。お付き合いよろしくお願ひいたします。

### ☆スタジオ夜話番外編「サウンドドラマ制作」番外編の歴史

スタジオ夜話のスタートは2013年の4月号です。ラジオドラマの効果音のお話から始まりました。ラジオドラマの始まりは舞台のリメイク版「桐一葉」1925年放送とされています。

一方それに遅れはしたものの同じ年の8

## スタジオ夜話

### 「古いヘッドホンもわるくない・・・！」

前は古いレコードのカッティングマシーンのお話をしました。またまたハイレゾが主流となってる今日、古いノスタルジーにお付き合いいただくのはちょっと気が引けるのですが、「好い音」のお話しなので無理矢理付き合わせてしまいます。筆者は現在主とし Beyer の DT250 を使っています。Beyer 社は 1937 年に世界で初めてのダイナミック型ヘッドホンを開発した業務用を中心とした老舗メーカーです。このモデルはまだハイレゾ時代前の製品ですがとにかく「好い音」なのです。決して「良い音」とは言いません。また時々ですがもっと古いパイオニアの SE20A なんてのも使っています。もちろん最近の製品オーディオテクニカ ATH-M60 なんていうものもあります。これなんかはたぶん「良い音」の部類になるのでは・・・しかし古い Beyer は仕事で長時間使っても疲れません。モニターヘッドホンとして今でもハイレゾではありませんが十分に使用できます。（現



ベイヤー  
ダイナミック、密閉型  
周波数特性：10～30,000Hz  
感度：100dB  
インピーダンス：80Ω



パイオニア  
ダイナミック型70cmコーン  
周波数特性：20～20,000Hz  
500mW  
インピーダンス：8Ω



オーディオテクニカ  
ダイナミック型ドライバー：φ45mm  
周波数特性：15～28,000Hz  
1,600mW  
インピーダンス：38Ω

在様々な評論をしている方の中にはこの製品の発売当時、高評価している方が何人もいらっしゃいます。）またちょっと古すぎる民生機器ですがパイオニアの製品は筆者の好きなジャズボーカリスト「ヘレンメリル」がそこにいるかのように耳で囁くように再生してくれます。今時のハイレゾ機器と比較にはならないのですが古いヘッドホンは「好い音」で鳴ってくれるものがあります。是非家の中を

探してみてください。「好い音」と青春が蘇ります。インピーダンスマッチングには若干のご注意を！

- ダイナミック、密閉型
- 周波数特性：10～30,000Hz
- 感度：100dB
- インピーダンス：80Ω

月にイギリス BBC 制作のラジオドラマ台本を翻訳して NHK で放送した「炭鉱の中」が我が国におけるラジオドラマの起源だとする説もあります。本誌スタジオ夜話はこれのお話からはじまりました。

スタジオ夜話番外編「サウンドドラマ制作」は 2014 年 1 月号が最初です。サウンド・ドラマの可能性を、制作技法を前提にその基礎について掲載しました。掲載してからすでに 5 年ほど経過しています。その間オーディオ機器も進化しました。一方サウンドドラマ制作は減る一方です。ひょっとするとサウンドドラマ制作にたずさわることの出来るスタッフが絶滅危惧種的存在になってしまったのではないかと不安にもなります。病原菌ウイルスは絶滅してもその元株は厳重に保管されています。人類にとって必要になる時のためのワクチンを製造するためです。絶滅危惧種的存在のサウンドドラマ制作者も今培養しておかないと本当にいなくなってしまうかもしれません。

#### ☆スタジオ夜話番外編

##### 「サウンドドラマ制作」デジタル初期

スタジオ夜話番外編「サウンドドラマ制作」のお話の基本は「創意工夫の制作」のお話でした。かつて多くのエンジニアが SN 比確保に苦戦、開発エンジニアはノイズリダクションを様々に提供しても来ませんでした。音声の世界はアナログからデジタルへと移行して一挙にそうした問題は無くなりました。一方で新たな問題も起こりました。デジタル初期、アナログが良いか、デジタルが良いか？といったことです。

筆者はサウンドドラマ制作においてデジタルのメリットがいかに大きいか実感してきました。音楽ソース制作者はこの違いを大きく問題としていましたがその真意がい

まだにわかりません。S 社がカラヤン指揮ベルリン交響楽団の CD を出版したとき、筆者はそのサウンドに驚きを隠せませんでした。当時高価だった S 社 CDP101 で再生した感動は今でも記憶に残っています。

また後日カラヤンのインタビューで本人も絶賛していました。後に当時関係していたエンジニアの談によるとデジタル収録に使用していた VTR のトラックインジケータは頻繁にエラーの赤が点灯していたそうです。しかし CD はすばらしいものに出来上がっていました。なにが問題だったのでしょうか？音楽はそれを演奏する人と鑑賞する人のためにあるものではありません。当時の音楽録音エンジニアは「今は高性能な機器があるので問題ありません。」とお話になります。カラヤンが絶賛した当時の CD の録音には問題があったのでしょうか？

筆者はサウンドドラマ制作の立場から効果音制作や劇伴制作にあたり、数回重ねなければならぬダビングや加工の数々を経験したことから、当時のデジタル技術には助けられた経験しかありません。また神業の精度を要する編集も可能になりました。

創意工夫とこうした技術的背景があって、それを理解しているエンジニアの存在がサウンドドラマ制作の歴史です。

#### ☆スタジオ夜話番外編

##### 「サウンドドラマ制作」創意工夫の歴史

創意工夫は今だからこそ必要なハウツーです。創意工夫が生み出した技術、かつて音楽録音の世界ではマルチトラックが常識となっていた時代があります。しかし TV 放送の世界では VTR レコーダーの機能としてマルチトラックは難しいとされていました。当時の業務用 VTR ではメインの音

声トラックと編集などに便利するサブトラック、編集点などをマークするキュートラックの 3 トラックが標準でした。その後 I 社から 8 トラックを有する MAV が製品化されましたが多チャンネル化する音楽制作に対応出来なくなります。本格的音楽番組制作が難しいということでした。そこでなんとか音楽収録用マルチチャンネルレコーダーと VTR を同期運転できないものかと考えます。そこで創意工夫が行われます。マルチチャンネルレコーダーの 1 トラックを同期用信号トラックとして利用、一方 VTR の 1 トラックにも同様の信号を用意して同時に動作させ信号のズレを検出してマルチレコーダーのサーボモーターをコントロール、同期運転するというものでした。この創意工夫は STUDER 社のテーブロックシステムとして実用化されます。TBS の音楽番組セイコー社提供の「サウンドイン S」という番組が放送されました。(1974 年 4 月) このシステム開発にあたっては TBS 社の加藤氏、スチューダー社の開発エンジニアの皆様の創意工夫があったからです。サウンドドラマ制作に限らず、また演出、技術などを越えた全ての人の創意工夫の歴史が今必要とされているのです。

#### ☆ 次回は

スタジオ夜話番外編「サウンドドラマ制作」そのまとめ II です。あと 2～3 回で番外編をまとめます。次回は目次を追って整理します。うっとおしい季節になりましたが読者皆様のご健康を願っています。

— 森田 雅行 —